

再建に向けて新生スガノが動き出した

あけましておめでとうございませう。平成30年（2018年）が日本農業の転換点になることを期待している。そんな中、スガノ農機(株)がよいよ再建に向けて動き出した。

17年12月4日、スガノは株主総会を開催し、新役員を選出した。今回、代表取締役社長に選出されたのは渡邊信夫氏。前職は(株)たち吉の代表取締役社長である。また、代表取締役専務として品田裕司氏(株)たち吉常務取締役)。さらに、取締役として大江充久氏(センコー(株))、田井中秀公氏(株)ジャパン・マーケティング・コミュニケーションズ専務取締役)。監査役として菅野鋭三氏(前スガノ農機(株)取締役)、非常勤監査

江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。まったく管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。

役として隈元慶幸氏(堀 総合法律事務所弁護士)が選出された。これに伴い、代表取締役の村井信仁氏、取締役の菅野充八氏および菅野鋭三氏は退任した。株主総会には同社労働組合関係者も参加していたが、全会一致で今回の役員人事が承認された。

去る6月12日の株主総会で村井社長、菅野充八氏、菅野鋭三氏を取締役に選出した時点から、創業家に代

わる新経営陣を迎えることは既定のことであった。そのため、85歳という高齢にもかかわらず、スガノの社員からも共感を寄せられている村井氏を社長に迎えたのである。しかし、菅野充八氏への反発は強く、組合員たちによるロックアウトにより村井氏は社長在任中に会社に入り入ることもできなかった。どのようなクーデターにしてもそれが起こる理由はある。それがクーデター派の言う通りのものであるかどうかはともかくとして。だが、今回の株主総会で組合も含めて反対がなく、12月6日の時点から渡邊新社長は会社に出社し、現在、社員との個人面談を続けていると聞く。一気に会社が旧に復することはないにしても、とりあえず同社の再建が始まったとして喜ぶべきであろう。

新社長となった渡邊氏は、創業263年という和食器の老舗たち吉の経営危機を再建するために百貨店の三越から社長として同社に入り、見事に再建を果たした方である。

スガノは必ずしも業績不振とはいえず財務内容も良好であったが、社長が社員や役員からの反発によって支持を失い、社内外に大きな混乱が

生じる事態となった。創業家出身の社長の不始末による混乱から同社を救済するという意味では理想的な新社長であろう。

新役員は農業や農機業界に關してはまったくの素人である。とはいえず、同社はこれからの日本農業にとって他に替わる者のない企業である。今後の変化を見つめながらも同社にかかわる業界関係者や農業経営者たちの支援が必要だと考える。

一方、全国土を考える会は12月11日に全国の会員を集めて総会を開き、同社を会の主幹幹事から外し、新たな会として動き出すことを決めた。同会は、スガノが3月4日に各地区の役員や役員経験者を東京に呼び集めて行なった会合以来、同社新経営陣が土を考える会の理念を失っていると反発し、3月28日の北海道土を考える会による臨時総会を手始めに各地区でスガノ排斥の声を上げ、今回の総会に至っている。

総会の席で前田喜芳会長は、「土を考える会は発足の原点に立ち戻るための今回の決議である」と挨拶した。しかし、会員の多くが、新生スガノが原点に戻って改めてその理念を取り戻した後に、土を考える会と日本農業の改革をともに進めていくことを願っていることも書き添えておこう。